



北海道マラソン2024 Hokkaido Marathon

SDGsの取り組み

北海道マラソン2024組織委員会

2024大会の新たな取り組み

北海道大学との連携

北海道大学との関わり

北海道大学札幌キャンパスは、2009大会からコースとして使用しています（38.6km～40.8km）。

暑さの軽減が見込まれ札幌に移転してきた、東京2020オリンピックのマラソンコースとしても採用されており、構内の景観の素晴らしさは世界陸連も認めています。

メインストリート（写真）は、コースの名所の一つ。普段も走れるエリアのため、札幌市内在住のランナーは練習として使い、北海道マラソンに出場する道外ランナーは大会前後で走るほど、人気のある場所になっています。

北海道大学は世界の大学のSDGsへの取り組みを評価する「THEインパクトランキング2024」で、1,963大学中、世界72位、5年連続日本1位を獲得する先進校です。SDGsの取り組みをより深化・進化させるため、北海道大学と共同プロジェクトを2023年に立ち上げました。

北海道大学の教授・学生などとともに北海道マラソンを通じて、北海道らしい企画を立案・実現し、先進的なSDGsの取り組みに繋げる活動に努めています。



きたみてガーデン SDGs農園プロジェクト



【引用：北海道大学×SDGs (<https://sdgs.hokudai.ac.jp/approach-to-sdgs/our-actions-and-proj/pj-11574/>)】

「きたみてガーデン SDGs農園」は、北海道大学サステナビリティ推進機構SDGs事業推進部門と北海道マラソン組織委員会が連携したプロジェクトで、北海道大学の札幌キャンパスで回収された落葉からできた腐葉土の利活用を通して、キャンパス内の資源循環の在り方について、本学の学生・教職員だけでなく地域社会とともに考えます。

総合博物館の中庭に設置したSDGs農園は、本学の教職員、北海道マラソン事務局及び本学学生を主体とした北海道大学総合博物館のボランティアグループ「きたみてガーデン」が造成・管理をしています。

プロジェクトの構成組織

企画: 北海道大学サステナビリティ推進機構、北海道マラソン事務局

協力: きたみてガーデン、ミュージアムカフェぼらす、北海道大学総合博物館、北海道大学施設部、北海道大学北方生物圏フィールド科学センター札幌研究林・生物生産研究農場

プロジェクト開始に至った経緯

北海道大学札幌キャンパスは、北海道マラソンの2009年大会からコースの一部として使用されています。北海道大学サステナビリティ推進機構SDGs事業推進部門と北海道マラソン事務局の両者はSDGsをテーマに、これまでの連携を更に深めることを検討してきました。本プロジェクトは、今後も北海道マラソンのコースとして使用する札幌キャンパスの持続可能性を高めることを目的に、北方生物圏フィールド科学センター札幌研究林・生物生産研究農場をはじめとして、きたみてガーデン、ミュージアムカフェぼらす、北海道大学総合博物館、北海道大学施設部の協力を得て実現しました。

【プレスリリース】

https://www.hokudai.ac.jp/news/pdf/240719_pr4.pdf



SDGs農園が出来るまで

● SDGs農園には、約1,500リットルの腐葉土が使われています。



SDGs農園で栽培した野菜をランナーに提供

◆カーボローディングパーティー

昨年も実施した大好評の企画を、今年は昼と夕方の部の2回にして大会前日（8月24日）に開催。スタート地点の大通公園を見下ろせる絶好のロケーションで、大会MCやゲストランナーと一緒に北海道マラソンの攻略会議。参加者同士でコミュニケーションを取りながら、炭水化物中心のメニューでエネルギーをチャージできるメニューを提供。



サラダ



炊き込みご飯

◆北海道大学総合博物館内にある「ミュージアムカフェ ぽらす」とコラボ

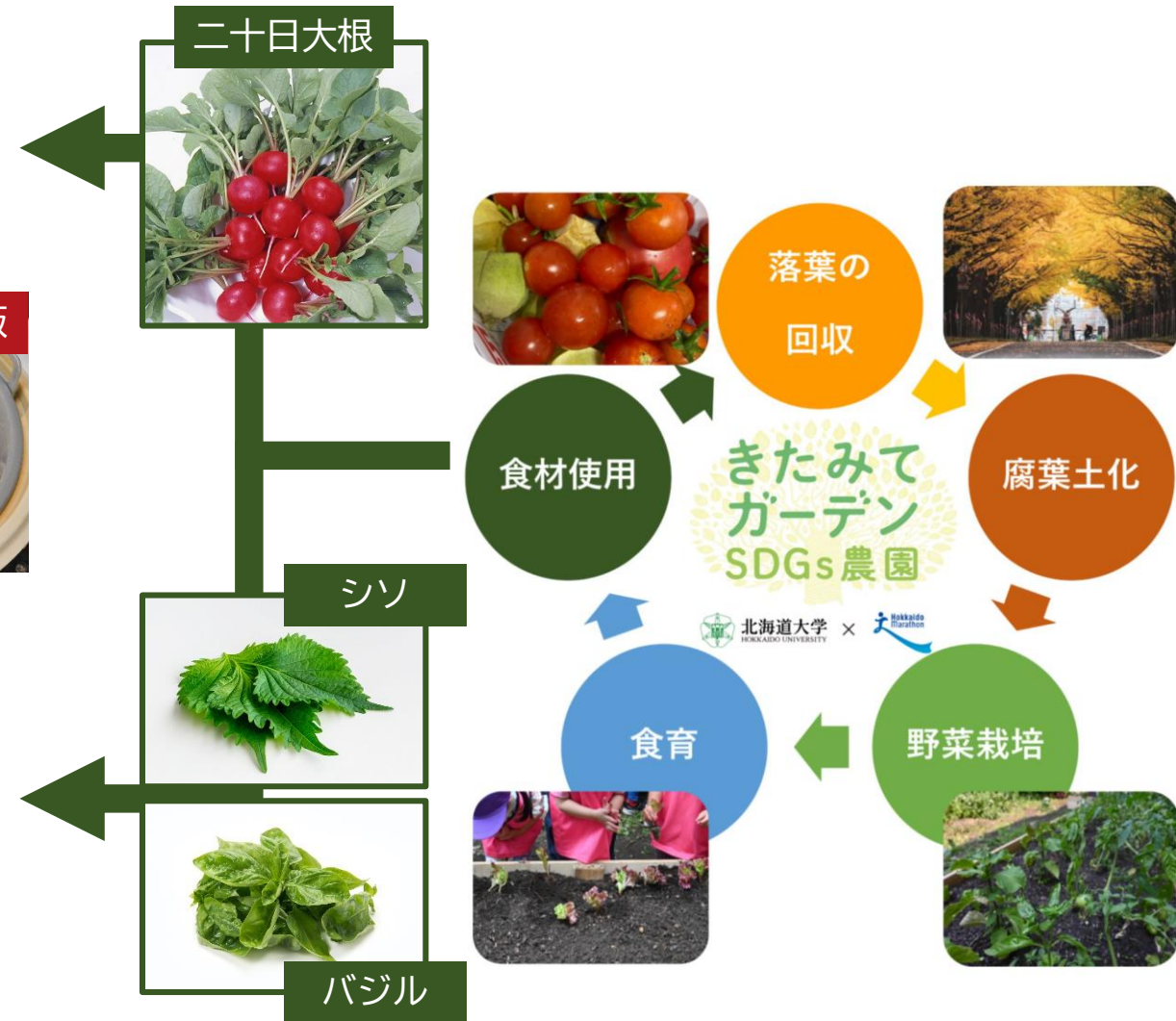
SDGs農園の管理を手伝ってもらい、大会前々日～当日の3日間（8月23日～25日）でオリジナルメニューを限定販売。



シソ
ジュース



ジェノベーゼ
パスタ



企画：北海道大学サステナビリティ推進機構、北海道マラソン2024組織委員会
協力：きたみてガーデン、ミュージアムカフェぽらす、北海道大学総合博物館、
北海道大学施設部、北海道大学北方生物圏フィールド科学センター札幌研究林
・生物生産研究農場

北大の木材を再利用



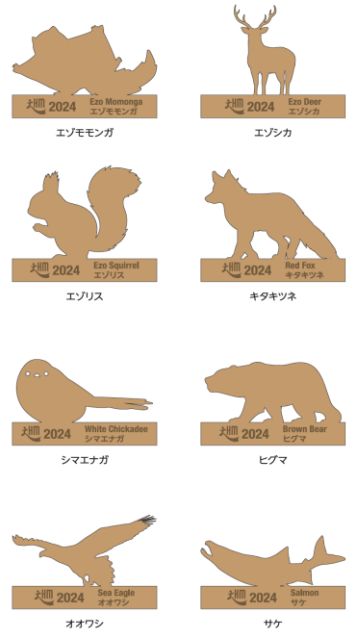
◆再生木材の動物パネルを折り返し地点モニュメント上部に

2023大会では森林環境保護のため、価値が低く原材料として消費されやすい北海道産の間伐材を使用し、老朽化した折り返しモニュメントを新調しました。

2024大会では北海道大学の跨道橋撤去工事に際してやむを得ず伐採された木を再利用し、北海道にちなんだ動物のパネルを制作。パネルは8種類の動物から、2024大会の参加者に投票してもらい、最も票を集めた「エゾシカ」に決定しました。

パネルは大会前日と前々日のEXP0会場（大通公園西7丁目）に展示。多くの来場者に見てもらい、大会当日は競技中にも関わらず、写真を撮る方もいました。

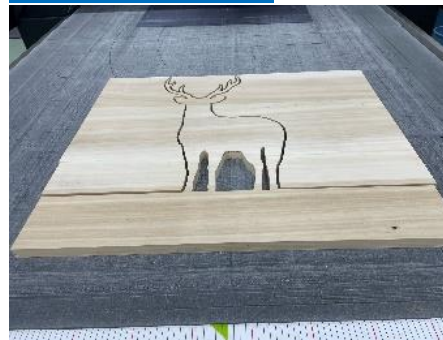
8種類からアンケート



ハルニレやドロの木材



板材にして加工



仕上げ



[参考：北海道大学の跨道橋の撤去について]
https://www.hokudai.ac.jp/news/pdf/210910_pr.pdf

企画：北海道大学サステナビリティ推進機構、北海道マラソン2024組織委員会
協力：北海道大学北方生物圏フィールド科学センター札幌研究林

2024大会の新たな取り組み プログラミングプロジェクト

北海道マラソンプロギングプロジェクト Supported by よつ葉



◆北海道マラソンとして「プロギング」に取り組む

プロギングとはジョギングとごみ拾いをかけ合わせた新しいフィットネスであり、スウェーデン語の「ploka upp (拾う)」と英語の「jogging (走る)」を合わせた造語です。北海道マラソンでは、本大会のパートナー企業であるよつ葉乳業と連携し、プロギングの取り組みを実施。

大会当日は10名の「プロギングランナー」がコースをきれいにしながら北海道マラソンを走り、翌日は「プロギング&リカバリーラン」を開催。参加者33名と一緒にコースの一部をきれいにしました。



(大会前日) EXP0ステージ



(大会当日) プロギングランナー



(大会翌日) プロギング&リカバリーラン



2023大会以前から継続している取り組み

その他の取り組み

17 パートナースhipで
目標を達成しよう



参加料の一部を寄付、地域を盛り上げ

参加料の一部を寄付するチャリティーは1999年から継続し、これまでの寄付総額は約6,590万円になりました。

2024大会の寄付先は北海道交通遺児の会、札幌市公園緑化協会、北海道新聞野生生物基金に加え、能登半島地震復興義援金にも充てました。

企業、大学、ボランティアなど、さまざまなパートナーと連携し、マラソンを通して北海道を盛り上げていきます。



3 すべての人に
健康と福祉を



「運動のきっかけ」を提供

2022大会でフルマラソンの制限時間を5時間から6時間に延長したことで参加しやすくなりました。

北海道マラソンの完走を目指してトレーニングすることが、健康増進につながります。



その他の取り組み

3 すべての人に
健康と福祉を



17 パートナースHIPで
目標を達成しよう



誰でも参加できるマラソン大会に

2015大会から「はまなす車いすマラソン」と合同開催、2018大会に「視覚障がい者の部」を設け、2024大会では「オープンの部」を新設。順位を競うことや性別、年齢に捉われず参加したい方を受け入れる取り組みを行いました。

北海道マラソンには約4,000人のボランティアが参加しています。コース上の給水や沿道の自主警備、救護活動など、多くの方の力に支えられています。ランナーだけでなく、ボランティアもまた北海道マラソンの主役です。



その他の取り組み

4 質の高い教育を
みんなに



子どもたちとアスリートが触れ合う機会を創出

親子を対象とした1kmのショートレース「ウイニングラン」を開催。トップレベルのアスリートを身近に感じてもらうことで、子どもたちのスポーツへの意欲向上に。
子どもたちが未来に向かって駆け出します。



7 エネルギーをみんなに
そしてクリーンに



北海道沼田町の雪を使ってランナーをサポート

25km地点付近の前田森林公園内にサポートエリアを開設。給食や給水に加えて、アイシングに使用できる雪を提供しています。氷を製造するのではなく、沼田町で夏の冷房用等に貯蔵している天然の雪を供給し、環境にやさしい大会を目指しています。



その他の取り組み

12 つくる責任
つかう責任



参加賞はサステナブルで 地球環境にやさしいTシャツ

回収した古着と繊維工場由来のポリエステル繊維（糸くず）を化学的に分解して原料に循環させた再生ポリエステル素材を使ったTシャツが、参加記念品（パートナー企業のオン・ジャパン提供）です。

また、EXPO会場内ではランナーから不要なランニングウェアを回収。2024大会のTシャツは昨年大会で回収されたランニングウェアを原料の一部に使用しています。



7 エネルギーをみんなに
そしてクリーンに



環境に配慮した車両を競技に使用

大会運営に必要な車両の一部に、パートナー企業である日産のEVとe-POWER車を使用。CO2排出量を削減するとともに、テレビやコース沿道で観戦する人に環境保護を考えてもらうきっかけをつくりました。



その他の取り組み

14 海の豊かさを
守ろう



受付袋も環境に配慮した素材を採用

大会前々日、前日のアスリートビブスをお渡しする際に配付するランナー受付袋は、パートナー企業のカネカが提供する、100%植物由来の海水中でも生分解される「カネカ生分解性バイオポリマー Green Planet®」で作られています。



7 エネルギーをみんなに
そしてクリーンに



印刷物の削減・紙資源の節約

WEBやメール、スマートフォンアプリなどの活用により、紙資源の使用量を抑えています。また、給水に使う紙コップはこれまで同様リサイクルし、貴重な資源を無駄にしません。環境にやさしいマラソン大会作りに努めています。

12 つくる責任
つかう責任

